

■2012 年度の活動報告

親による虐待や不適切な養育が急増する昨今、我が国では児童相談所を中心とする行政の努力にも関わらず解決の兆しは一向に見えません。ぐるーんは抱っこやスキンシップという基本的かつ人間の根源的な欲求に基づいた活動を主軸に、幅広い市民参加、企業参加を促し、行政・企業・市民セクターの連携協働のもと、以下のスリーステップで虐待などで親と離れて暮らす子ども達が家庭的な環境の中で成長できる社会の実現を目指してきました。

1. 市民と乳児院や児童養護施設にいる子ども達の交流を促す
2. 里親制度や養子縁組制度の広報 PR につとめ、社会の認識を深め市民の啓発に努める
3. これらの活動から「血縁」を超えた、様々な新しい絆をうみだす。

■しかしながら、現実的には、以下の2つの課題があることがわかりました。

1. 血縁以外の家族の形への無知と理解不足

里親や養子縁組のなり手となる可能性が高いと思われる不妊治療者の約 6 割が、養子縁組や里親という選択肢を「考えたことがない」と答えています。(2010 年「不妊当事者の経験と意識に関する調査」(白井千晶 日本学術振興会特別研究員)その理由として、「ほしいのは自分と配偶者の子どもである」という血縁へのこだわりが 66%と最も高く、「養子や里子を育てる自信がない」45%などの自信のなさが続きます。また、「配偶者が賛成しない」「親や親戚が賛成しない」「周囲の偏見」など、周囲の人を考慮した理由がそれぞれ 14%。「よく知らない」も 21%となっており、血縁に対するこだわり、無知からくる不安、偏見等を払拭することが里親制度や養子縁組の普及には不可欠だとわかります。

2. 乳児院や児童養護施設の子ども達に対する無知や偏見

「子どもは地域で育てよう」と言われながら、児童養護施設が建設されると住民の反対運動が起こるということがしばしば報じられています。地域や社会が乳児院や児童養護施設の子ども達を心理的に受け入れているとは言いがたいのが現実です。しかし、それはそもそも一般市民が乳児院や児童養護施設の子ども達と接する機会がな

い、つまり「無知」からくる「無理解」が原因とも言えます。

さらに、最終的な目標である親と離れて暮らす子ども達が、家庭的な環境の中で成長する世の中の実現を目指す上での課題は、主に「里親制度や養子縁組制度の広報不足」「里親・養親と里子・養子の出会いの場の少なさ」「里親・養親と里子・養子の斡旋機能不全」「縁組後の養親へのサポート不足」の4つだと考えています。

■以上の課題を踏まえ、2013年度は以下の4つの活動を推進、あるいは推進して行ける体制を整え、里親制度や養子縁組制度の普及を目指します。

<里親制度や養子縁組制度の広報不足への対策>

1. 抱っこサポーター派遣、シンポジウム開催：親を必要とする子どもたち、里子、養子の現状を伝えることにより、市民の啓発に努め、共感と社会的な責任感を植えつける。

<里親・養親と里子・養子の出会いの場の少なさへの対策事業>

2. KID'S イベント開催：市民と乳児院や児童養護施設にいる子ども達の交流を促すことで、滞りがちな出逢いの機会を増やす。里親になることを検討している人にとって最大のハードルは親子の「相性」への不安。この「相性」は「交流活動」を通じて双方が確認し合うことができ、里親希望者の心理的なハードルを引き下げる効果と、その後の幸せな家庭環境の維持に繋がる。

<里親・養親と里子・養子の斡旋機能不全への対策>

3. 里親・養親と里子・養子マッチング：上記1、2の活動から「血縁」を超えた様々な新しい絆をうみだし、マッチングにかかる時間の短縮とミスマッチを防ぎ現状を打開する。そのための、施設職員、行政窓口、弁護士のチームが縁組を支えるプロセスを確立する。

<里親と縁組後の養親へのサポート>

3. 縁組後、定期的にサポーターを派遣。また、交流イベントへ誘導する等、子育て孤立に陥らないようケアをする仕組みを確立する。

以上